

### 第34期小田原市図書館協議会第7回協議会 会議録

日 時：令和4年5月27日（金） 午後2時から午後4時まで

場 所：小田原市立中央図書館2階 研修室

#### 1 委嘱状の交付

#### 2 あいさつ

文化部・鈴木部長

#### 3 報告事項

##### （1）利用者からの意見・要望等について【資料1】

○事務局説明（資料に基づき石川副館長より説明）

○質疑応答

副 委 員 長：中央図書館（項番2）利用者の意見要望の内容は、生涯学習センターけやきの休館日に、本庁舎で図書の返却を行いたいとの内容だが、検討したのか。また、できるかどうかを記載すべきでないか。

石川副館長：本件は、本庁舎の総合案内が対応し、要望内容を図書館に報告を頂いたもので、要望された方と直接、話をする機会がなかった。本庁舎に設置することは困難なことから、他の図書館に設置してあるブックポストを使って頂くよう周知する事にした。

副 委 員 長：本庁舎にブックポストを設置できない理由は何か。

図 書 館 長：けやき図書室のブックポストは、生涯学習センターけやきの施設内に設置しており、施設が休館になると利用ができなくなる。そのため、休館日に図書を返却するには、館外にブックポストを設置する必要がある。図書館は、ニーズを把握していなかったもので、生涯学習センターけやきを所管する生涯学習課と協議し、館外にブックポストを設置することの可能性を探っていく。ブックポストを館外に整備する場合、管理上の課題もあり、即答は難しい要望だと思う。

副 委 員 長：この人は、本庁舎内に返却したいようだが可能なのか。

図 書 館 長：けやき図書室のブックポストは、生涯学習センターけやきの施設内に設置しているが、施設が休館になると利用できないので、本庁舎内で返却する方法もあるかもしれない。

馬見塚委員：アークロード市民窓口に設置してある簡易なブックポストなら設置が可能でないか。

図 書 館 長：アークロード市民窓口のブックポストは、（施設内に設置しており）施設が開いている間は返却することができるが、その返却された本は図書館が回収を行っている。

本庁舎内に同様のブックポストを設置した場合には、本を回収するルートを追加するなど、方法を検討する必要がある。

馬見塚委員：現状はかなり不便だと思うので前向きに検討していただければ良いと思います。

馬見塚委員：中央図書館（項番7）予約順位の仕組みは、どうなっているか。

石川副館長：ご意見を頂いた方は、予約順位が1位であったため、今、借りている方の貸出期間が終了する2週間後には借りられると思っていたようだが、本を受け取るまでの取り置き期間が最大で1週間あり、さらに延滞したため、予約から3週間半が経過しても本が提供されなかったようだ。ご意見はあったが、大部分の方が、今のルールに慣れているため、予約順位の変更は行わない事にした。

馬見塚委員：東口図書館（項番3）前の人の貸出レシートが挟まっていた件は、利用者のマナーの問題で、図書館の仕事ではないと思う。注意書きで促す程度で良いのではないかな。

青柳統括：返却された本に関しては、破損や汚損がないか1冊ごとに確認を行っているが、薄い貸出レシートは、見落とししたと思われる。利用者が、前の方の貸出レシートを見て、快く思わない方もいるので、見落としがないように対応する。

図書館長：関連して、補足説明させて頂く。気持ちよく利用していただくために、努力をしていくが、できない部分が出てしまうこともある。例えば、本の汚れを見落としとして本棚に戻してしまうこともある。本の取り扱いについては、利用者のマナーによるところだが、マナーの喚起については、注意書きを掲出するだけでは、なかなか伝わらず、課題と感じている。

## （2）令和3年度小田原駅東口図書館事業報告概要及び評価について 【資料2】

○事務局説明（資料に基づき図書館長、植田副館長、青柳統括責任者より説明）

○質疑応答

北河委員：東口図書館の利用者の満足度は高く、図書館員の対応が非常に良いと評価が高い。すばらしく、努力されていると思う。公共図書館であるが、民間の力が入っていて、その成果の表れと感じる。具体的に、どのような職員教育を行っているのか。

青柳統括：入社時に有隣堂の本部からの接遇研修を行うほか、実際に対応している様子を見ながら、こうした方がいいよと、その場で指導を行っている。利用者を第一に考えることと、言葉の抑揚によっては、同じ事を言ってもクレームに繋がったりするので、気を付けるようにと注意している。

武田委員：東口図書館に寄って、たなかきよおさんの原画と、それに関連して本棚に影響を受けた本のコーナーが設置してあり、関連性とかの扱いが非常に良いなと思った。たなかきよおさんがデザインをされた切手も展示してあり、窓口の方に、「たなかきよおさんの切手は、郵便局で売っているのか」と、本とは関係ない

ことを尋ねたところ、「郵便局での販売は終了しているが、江嶋では、まだ扱っているようです」と教えてくれた。図書館のカウンターの対応は、言葉使いも大事だけど、利用者の立場に立ってのサービスというか、こういう会話に繋がるのもいいなと感じた。一例を挙げたが、カウンターをベースにいろいろな会話が生まれるのも良いと思う。

青柳 統 括：普段から、そのような対応になると良いなと思っている。今回は、たまたまであるが、たなかきよおさんに、利用者から聞かれそうな質問を事前に聞いており、切手の事も聞いていたので対応できて良かったと思う。今後も、心がけていきたいと思う。

野 村 委 員：ツイッターの情報発信で、アンケートに答えてくれたのが10代の方と60代以上の方が多い。（ツイッターの内容は）以前に見た時も、子どもの読み聞かせなどの情報が多いが、30代、40代の子育て世代は、子どもを抱えてアンケートに答えられないなどの事情があるかも知れないが、あまりツイッターを見ていない事を考えると、ティーンズ向けの児童図書など、中高生に向けた情報発信をツイッターで行ったらどうか。前にもツイッターの使い方によって炎上するかどうかの議論があったが、効果的な運用をした方が良い。また、希望イベントで、鎌倉殿の13人が挙がっているが、タウンニュースで小田原史談会が原稿を書いていることや、小田原市は、郷土史家の方が多いので連携してやれば面白い企画ができるのではないかな。

青柳 統 括：ツイッターの件については、若者に見てもらえるような発信を考えて行きたい。史談会との連携については、例えば、鎌倉の事をお話し頂いて、その本に関する朗読会などを実施したいと考えている。

加 藤 委 員：去年の夏、学校の職員室で東口図書館の事が話題となった。東口図書館の上の検診センターでワクチン接種をした教職員が、待ち時間を、東口図書館を利用して過ごし、非常に良かったと職員室で話題となった。これをきっかけに、自分のお子さんを連れて、本を購入したとか、ご自身が図書館を利用したりすることになったなどの話があった。このとき、立地条件は大事だなと感じた。また、小田原駅東口図書館自己評価表4ページの「学校、ボランティア団体との連携体制を築いた」については、中央図書館と今後の進め方を協議中とあるが、学校と連携して本離れを食い止めたいと思っているので、学校との連携体制を築いて欲しい。

武 田 委 員：蔵書は多いに越したことはないが、検索して、図書館に置いていない事もある。そうした場合、近隣の図書館との貸し借りする仕組みはないのか。また、東口図書館は交通の便がいいので、ビジネス系の図書を求める方が多いのではないかな。ビジネス書籍の幅が広く、いわゆるマネー本は、図書館で備える必要はないと思うが、経

経済の教科書的な本はあった方がよい。ベストセラー的なマネー本は図書館が備えてなくてもよいが、一般書店との役割分担や戦略を、どのように考えているのか。

図書館長：蔵書に関しては、神奈川県内図書館のネットワークがあり、小田原市に蔵書がない場合、他館から取り寄せすることができる。ビジネス書の関係については、東口図書館のあるミナカの中に、企業やビジネスの拡大など、新しいまちづくりを目的としたイノベーションラボという公民連携の拠点施設があり、東口図書館からビジネス系の書籍を団体貸出している。イノベーションラボをご利用者されている方のニーズや要望を聞き、連携しながら支援をしていきたいと考えている。

委員長：東口図書館の評価については、厳しめに感じる。2ページの評価基準の「立地を生かした事業など具体的な取組を実施した」については、コロナ禍で実施を見送ったとのことであるので、評価点は2でなくてもいいのではないかな。

青柳統括：来年度は、評価点が3になるように努めたい。

### （３）図書館運営のあり方について 【資料３】

○事務局説明(資料に基づき図書館長より説明)

○質疑応答

委員長：催しの賑わっている様子を映像で見たが、集中授業と重なり参加はできなかったが、次回は参加したいと思う。図書館運営のあり方についての（１）の外に開いた図書館運営と（４）の価値創造に向けた取組については重なっている部分がある。外との関わりについては、まちとか人に繋がる図書館運営を意味しているのかなと思った。（２）の必要な専門性の確保と（３）の地域資料・既存資料の活用と蔵書の充実の関連性については、（３）の内容が提示された上での（２）の内容が展開されるということか。

図書館長：（２）と（３）は密接で、地域資料を扱う上で専門性が必要になってくる。地域資料に限らず一般資料を使ってレファレンスしていくとか、図書館そのものをどのように展開していくのか、図書館の社会環境が変化している中で、ニーズも膨らんでいるので、ニーズを捉えていく上で、専門性の確保は必要だと思う。また、地域資料に関する専門性も必要と考えている。どこの部分でどのレベルの体制にするべきかについては、少し詰めて考えていかなければならない。

野村委員：小田原市の地域資料の課題は、目録などが公開されていない事である。研究者というよりは、地域資料のところでレファレンス機能のある司書がいた方がよい。他の館に無い資料が、何があるのかわからない状況なので、対応してくれるとありがたい。（２）の専門性の確保については、１階の司書と２階の司書に求めるものが違うので、（４）の価値創造に向けた取組についてと関係し、どのように

切り分けをするのが課題になってくると感じた。

図 書 館 長：旧市立図書館と中央図書館がある時は、地域資料は旧市立図書館、それ以外の一般的なものは、中央図書館という区分けがあった。現在は、旧市立図書館は中央図書館に統合され、整理して混ぜ切れていない状況にあり、専門性の配置について課題になっている。さらには、東口図書館と中央図書館との区分けについても考えていく必要がある。

野 村 委 員：以前、北条氏の資料を展示していた時に思ったが、研究者や興味がある方は、遠方であっても見に来るが、地元の子も達が愛着を持つ意味で調べる時には、東口図書館の方が通いやすいので資料を、貸し借りしたりして展示するのも良いかと思う。一番良いのは、どんなものがあるかとか目録が詳しく備わっている方が良い。

委 員 長：図書館運営のあり方については、いつまでに完成させるのか。

図 書 館 長：今年度着手したところであるが、今年度中に完成をしたい。委員の任期中の最後の協議会となるので、現時点の考え方を示した。

#### 4 協議事項

(1) 第三次小田原市子ども読書活動推進計画における基本方針及び計画推進のための方策について【資料4】

○事務局説明（資料に基づき植田副館長より説明）

○質疑応答

野 村 委 員：子ども読書活動の目指す姿は、調べる学習をさせたいということなのか。「疑問も見つけ、疑問を調べ、疑問を解決する」とあるが、疑問がなくても読書はするもので、読書は、楽しいから、興味があるから読むのであって、楽しさを伝えることが大事だと思う。7つの方策を見ると、内容はよくわかるが、子どもに対しては、疑問がなくても読みたいと思わせることが大切だと思う。

馬見塚委員：網かけの部分で、一番大事な部分は、「生きる力を育む」だと思う。生きる力を育むために、調べる学習をするかのような表現になっているが、しっくりしない。なぜ、調べる学習を打ち出されたのかを聞かせてください。

委 員 長：基本方針と7つ方策は非常にわかりやすいまとめ方をされているが、イメージの部分については、委員の皆さんの馴染みがないようなので、補足説明すると、探求プロセスでよく使われる図式で、学校図書館の文脈だと、「主体的・対話的で深い学び」で学びを深めるための探求学習が非常に重視されており、図書館活用は、読書活動だけでなく、学習活用、授業活用が重視されている。読書活動をどう結びつけるかの視点の文脈においては、このイメージ図を違和感なく受けとめ

たが、委員の話を聞いて、おっしゃるとおりだなと思ったところはあった。

図 書 館 長：学校の指導要領においては、子どもの主体性に観点をおいた学習がクローズアップされており、本は、自分で主体的な考えで活用できるツールとして、非常に重要であることから、計画で目指す姿として打ち出している。きっかけや楽しむ事はいろいろな形があつて、それがどのような形で繋がっていくのかはわからない。教育の観点で、子ども読書を捉えた場合に、このようにクローズアップした姿が、我々の中で出てきた。委員の話を頂く中で、まずは、本に対する興味関心を持って頂くことを、子ども読書活動の中で幅広に捉えていく必要を感じた。図書館は教育委員会のセクションであるので、目指す姿については、そのニュアンスを計画に盛り込んでいきたい。

馬見塚委員：主体的な学習は、非常に大切だと思うが、学習指導要領で、調べ学習の推進については、言及していない。登場人物になりきり、作品自体を吸入し、心が豊かになるとか、人生が豊かになるとか、心の成長とかを視野に入れた方が自然かなと思う。実情的なことを持ち出さないと行政としては難しいと思うが、読書はこれだけでなく、大きな価値があると思う。

委 員 長：目指す姿は1つでなくて良いのではないかと思う。馬見塚委員の言った視点もあるだろうし、こういった視点もある。それらを受けて、基本方針と7つの方策に繋がるのだと思う。私は、基本方針と7つの方策は、明確でわかりやすいと思ったが、目指すべき姿をどう位置付けるか、この形だけで良いのかという点で、皆さんから意見が出てきている。

図 書 館 長：調べる学習が、疑問を見つける、疑問を解決するというプロセスを持っているのでこのように設定したが、目指す姿を、調べる学習だけでイメージされてしまうのであれば、この表現は考え直さなければいけない。図書館では、調べる学習だけですべてを表現しようとは考えてはおらず、興味関心の入り口が本であったり、子どもたちの活動に繋がっていく過程の中に本があることで、活動が充実されたものになることを期待している。例えば、物語から入って、物語を書くとか作るとかをイメージする子どもがいるかもしれないし、それは、たしかに調べる学習とは違うと思う。委員の皆さんの意見をまとめると、目指す姿は、子どもの成長の中に、幅広く本が関わっていくようなイメージを作ると良いという事になるか。

委 員 長：本を読むことは楽しむとか、自らの内面を豊かにするだけでなく、課題解決力とか、探求していく力のベースになる側面はあるのだから、その辺の読書像をどう捉えていくのかだと思う。例えば、子どもの読書推進に関する法律に基づき作成する計画だが、図書館法での図書館の目的、役割は何かというと、市民の教養、調査研究、レクリエーション等に資することとなっており、図書館を使うこと自

体に幅があり、読書をするという事は、それだけ幅を持った活動なので、提示の仕方は難しい。考えてまとめた事務局の努力は敬意を表すが、その一方で委員の皆様からのこれだけに絞っていいのかとの意見もわかる。それをどう提示するかについては悩ましい。何か良いアイデアはありませんか。

加藤委員：この計画を見た時、学校職員が目指す子どもたちの学びの姿そのものであるが、読書イコール学びなのかという、そればかりではないなという思いがある。この資料の学びの姿を最大限に生かして使うとすると、例えば、疑問を見つけて、調べて解決すると、新たな疑問が発生するので、最初に戻って、疑問を調べて解決する連鎖があつて、上に向かっていく図になる。それが読書と捉えると、高尚というか、子どもたちには敷居が高いのかなと思う。子どもは、どの範囲を指すのか。

委員長：厳密には、小田原市の教育委員会の所管は幼児から中学生までとしているが、今回、高校生までを連携対象と考えている。また、法律上の定義は18歳までとなっているので、そこをターゲットにしている。

北河委員：この資料を見て、個人の課題の解決はとても大切だと思うが、シンプルに本を読むことは楽しいし、ご飯を忘れて読んでしまう事は、本好きの方にはよくある事。本が嫌いな子は、良い本に出会えていないのだと思う。個人の課題解決だけだと寂しい気がする。

副委員長：疑問を見つけ、疑問を調べ、疑問を解決する、このコピーライツ的な3つの行動が、子ども読書活動の推進の目指す姿となると、疑問を感じる。自分が今まで活動してきた、子ども読書活動は、ここに含まれていないと思いましたし、小田原市の子ども読書活動はここに特化していくような認識になった。この表はこれであつても良いし、わくわくして楽しんで世界が広がるような、この表にないような読書もあつても良いと思うので、目指す姿が、疑問を見つけ、疑問を調べ、疑問を解決する、の3つだけだと、どうかなと思う。

委員長：発達段階に応じた読書活動の推進は、国の基本計画を柱に位置付けている。もしかすると高校生の段階だとかこういったところを重視するのは、ありかもしれない。幼児から段階を追って見ていったときに、その辺をどう描き出すのかが必要なかもしれない。どうまとめるかについては、具体的には出てこないが、委員さんの発言が共通しているところがあるようなので、目指す姿については、改めて、検討して頂けるとありがたい。先ほど、7つ方策については、明確でわかりやすいと発言したが、7つの要素の中から漏れている、8つ目の要素になるかも知れないが、「誰一人取り残さない読書活動の推進」の視点が大切でないか、つまり、支援が必要な子とか、外国にルーツがある子、そういう子の読書を推進す

るという視点は明確に打ち出した方が良い。読書バリアフリー法が施行や、いろいろな流れがあるので、方策の柱の1つに入れた方が良い。それぞれの要素の中に含まれているとは思うが。

武田委員：漠然とした感想だが、なぜ読書を進めるかは、生きる力、想像力がベースにあるのかなと思う。それは、読書でなく音楽でも良いのですが、あらゆる子どもの生きるための想像力は大事だと思った。

松本委員：子どもを育てながら、本との出会いは大切だなと感じた。私の子どもは3歳児検診の時に、市から本を1冊頂ける事業があり、本をびりびりになるまで本を読んでいた。幼児の時のそれがきっかけであったり、小学生、中学生になっても、そのようなきっかけがあると良いのかなと思う。

馬見塚委員：（3）学校・幼稚園・保育園におけるとあるが、幼稚園も学校なので、表現を工夫してほしい。

委員長：学校教育法上、幼稚園も学校なので確かにそのとおりである。今までも、同じ括り方をしていたのか。

図書館長：今までの表現は同じ。ここでの区分けは、就学前、就学後の区分となっているご指摘のとおり、幼稚園は学校なので表現は整理する。

委員長：この7つの方策で、重要な視点をいれて頂いていいなと感じたのは、（3）学校・幼稚園・保育所のところで、「私立の」と入れていただいた点は非常に良い。今までは、市立の図書館だから、公立の学校、幼稚園との連携を盛り込むのですが、民間の幼稚園、保育園を柱として位置付けてくれたのは、非常に良いと思う。個人的には、高校生や大学生との連携を含めて位置付けたのは重要で、読書活動、読書の力を連続して考えていくことが必要で、進学につれ学校段階で、切れてしまいがちになる。小中学校は義務教育なので繋がるが、中学校から高校は断絶するので、地元の高校と連携を深めていくことが大切かなと思う。せっかく中学校までに培った読む力を高校生になっても伸ばして欲しいし、それを大学生までフルに発揮して欲しい。そういう視点での連携や連続性を意識して頂けるとありがたい。

図書館長：計画案を修正したいと思う。第1次、第2次計画の子ども読書推進の目指す姿を改めてみると、1次計画では子どもを取り巻く様々な生活の舞台の中で、読書活動が推進されることを1つの大きな目的として掲げられていた。2次計画では、1歩進めて、どのような成長を期待しているかを掲げて作られてきた経過がある。3次計画では、学習指導要領を踏まえながらの表現としているが、第2次計画で目指す姿を幅広に、委員の皆様から頂いた意見を参考に検討したいと思う。

## 5 その他



(1) デジタル図書館について

○事務局説明（資料に基づき植田副館長より説明）

○質疑応答

委 員 長：デジタル図書館のネーミングは決まっているのか。

図 書 館 長：資料は、電子書籍の貸出サービスを始める内容だが、中央図書館、東口図書館で新聞のデータベースの閲覧は既に行っており、そのサービスを含めてデジタル図書館の名称でサービスを始める。

委 員 長：地域資料のデジタルアーカイブもデジタル図書館の1サービスということか。

図 書 館 長：そのとおり。

委 員 長：利用するには、図書館の利用登録がされている方に限るのか。

図 書 館 長：本の利用登録者は、近隣市町の在住者も対象になっているが、デジタル図書館のサービスは市内在住、在勤、在学に限るとする予定だが、決定していない。

委 員 長：学校に配布したギガ端末で利用することはできるのか。

図 書 館 長：利用できるように考えているが、提供できるサービスは、基本的に1コンテンツ1人となるので、授業でクラスの全員で同じ資料を見るような使い方はできない。学校での運用については、これからの課題となる。

委 員 長：教員が資料を黒板に投影して、みんなで見るような運用はできるので、そうなれば、学校側からすると電子教材が増えるということか。

図 書 館 長：そのとおり。

(2) 事務連絡（石塚副館長）

・次回の協議会は10月頃開催予定。

委 員 長：第7回の図書館協議会を終了する。